

編集・発行責任者；木下耕一 〒157-0066 東京都世田谷区成城 8-24-1 - A-201
Fax&Tel 03 - 3482 - 5257 / E-Mail ; kino-coh1@amy.hi-ho.ne.jp

『施設のあり方』について学習を深めよう

かたつむり通信十二月号が届きました。一面タイトルは「この一年間を顧みる『事業報告会』」「たましる」運動に新たな光明が……となっています。

記事によれば「売り渡し承諾書も取得でき、地元住民との懇談に入りまして。」とあります。これは、もしかしたら年末のビッグニュースかもしれない。

実は、地下鉄の吊り広告で見た九十九年前半獅子座の運勢には、「夢や理想に向けて潰き出す好機」とあり、「それって、もしかして「たましる」のことでは」と思っていたのです。アンアンのお占いは当たるかも……。

* * *
先日、かたつむりを訪問

したとき、花田所長から「これからは、土地の取得問題だけでなく、具体的な『施設のあり方』についてもっと学習を深めていかなければいけないよ」と言われました。

一九九四年七月、めざす会主催で京都いこいの村大阪なかまの里の施設見学会がありました。僕は、「ビデオ係りとして働くから是非いっしょに連れてってください」と頼み込んで参加しました。あれからもう四年。

仲間たちが楽しく暮らせる施設ってどんなだろう、ということをもう一度最初から勉強し直したいと思っています。みなさんもちがいますか？

十二月二十日(日) 十時
杉並ろう学校(下高井戸)

新聞スクラップ

1210 毎日

東京弁護士会(二宮忠会長)は十日、人権擁護活動に功績のあった個人・団体に贈る「東京弁護士会人権賞」の今年度受賞者を発表した。

受賞者は、長男が難病と診断されたのを機に難病患者運動に取り組む東京都日野市地域ケア研究所常任委員の石川左門氏(七二)「日野市在住」と、七歳の時に聴覚を失い、聴覚障害者への大学の門戸開放や聴覚障害者への差別的な法律の改正などを実践してきた都職員野沢克哉氏(五九)「横浜市在住」。

石川氏は「筋ジストロフィーで二十歳までの命と言われた息子に『生まれてきてよかった』と思えるような、幸せで人間的な生活をさせたいとの一心でやってきた」と語った。

野沢氏は「バス停に並んでバスを待つていたら、いきなり後ろの男性に新聞で殴られた。男性は私に時間を聞いたのだが、私が何も答えなかったので無視されたと思ったからだ。外から見ても分からない障害に対して、たくさん誤解が日常的にまだある」と話した。

差別法制撤廃運動で先頭に立つ野沢さんが受賞されました。素晴らしい事です。もう一人の受賞者石川左門さんとも日野市にいた

頃一緒に活動をした事がありとても嬉しいニュースでした

BOOKS

現代用語八月号「特集 液状化する日本語」より『手話と日本語』

(斎藤道雄 青土社千二百円)

斎藤さんはTBS「報道特集」のディレクター。今年の二月九日に放映された「手話の世界」を製作され、それ以来、手話に関して主に「ろくろの言葉」手話が、まだまだ抑圧され、手話学習者や手話通訳者にさえ正しく認識されていないという姿勢で二度ほど意見を書かれています。

放送の内容については、いくおる二十三号「マスメディアに登場した人たち」でシナリオ全文が紹介されているので是非お読みください。

今回の論文は、手話と日本語とは全く異なる、ろくろ固有の自然言語なのだ、ということテーマに書かれている。

その違いは、「アルファベットで書かれた文章を英語だと思って読んでみたら、なんとローマ字で書かれた日本語だった」ような状態にあり、大多数の手話使用者・学習者が、日本語と日本語の違いを正しく理解していないと批判している。

手話を学ぶ時、その手話、本当の手話なの？と私達に問いかけている。手話通訳は、小林真由美さんだよん